



被災地農業は未来の先取り？

東日本大震災から10年が経過する。節目にあわせてTVの特別番組やシンポジウム等が続く。コロナで現地に足を運ぶことはかなわず、これらを通じての情報にとどまるが、復旧はすすんでも復興には程遠いのが実情とを感じる▼特別番組の一つ、NHKのTVシンポジウム「被災地に見る農業の可能性」東日本大震災から10年」を見た。被災してから現在までの足取りを克明にたどるとともに、農業現場での苦労・悩みも取り上げつつ、多彩なパネラーによる多様な見方を交錯させた力作であった。しかしながら一点、正直なところ違和感を禁じえなかったのが、「被災地での農業は日本農業の未来を先取りしている」との総括である。多くの農家が営農を取りやめる中、かろうじて残った農家が農地を集約して大規模化し、大型農機を導入するとともに施設型へと転換したことを指す。それまでは多くの小規模農家・兼業農家がいて、そうした中に大規模農家もあって、地域の農業は守られてきた。ところが兼業農家等は帰農せず、地域コミュニティは喪失したまま。農業は企業的農家に一元化され、農業収入も以前より増加した、と報じる。しかしながら多額の補助金と借入れが推測され、経営の自立性・継続性は確保されているのか懸念される。補助金主導型の農業再興に、生産者の浮かない表情が気にかかる▼これとは対照的に、現場の表情が苦悩に笑顔も混じるようになってホツさせられると同時に、取組みに納得し感動もしたのが日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会が作成した映画「ワーカーズ」被災地に起つ」である。被災者が労働者・経営者・出資者となって、発生する地域問題に、七転び八起きしながらも協働の力で挑戦していく様子を「虫の目」で追う。確かな目線を感じさせる。是非一度ご覧になることをお勧めしたい。

(土着菌)